

「グローバル英語教育の導入」 ～Topic Centered Teaching Method～



***** 中学校 教諭 松本 光正

1. はじめに

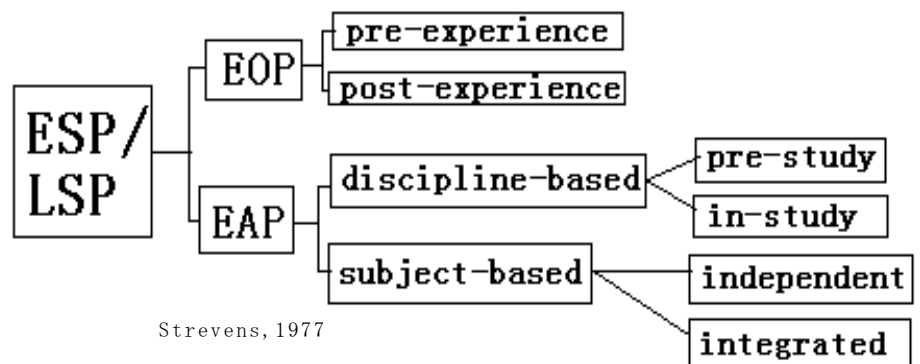
「言葉は文化」である。英語学習と言っても、音韻論・語用論・語彙論・意味論、レトリックに至るまで細分化されています。何から始め、どこに焦点を当てて指導していくのか。時代とともに流行り廃りがあるように、英語指導法も時代とともに変遷してきました。全盛となった CLT 教授法のさまざまな問題と限界について、例えば Natural Acquisition などの ESL 教授法には、California のスペイン語教授法から生まれてきた Natural Approach に代表されるように、「生きるための英語」「生活に密着した英語」として「学習者側に最初から英語獲得の強い Motivation や必要性が存在」しています。特に日本独自の EFL 環境に馴染まない点として、学習時間、学習量、教室外での英語使用環境、そして何よりも学習者側の Motivation が挙げられます。また、学習者側の英語の「必要性」は主に受験を意識した方向に傾いている事実も否定できません。更に、4 技能習得と国際理解教育、情意面高揚、コミュニケーション能力等の生徒の内面までも意識した多角的な教授法は授業の煩雑さを生み、「生徒の基礎学力の欠如」を生み出してはいないか、このことは TOEFL の国別得点比較の推移からも判断できる事実でもあります。

現行の英語指導環境では時間・量・指導者の英語力等に関する問題がよく取りただされまます。週 4 時間の英語授業での“Natural Acquisition”は大変難しいでしょう。何よりも日本の外国語教育の場合、強い母語干渉があることは事実として否めません。また、外国語使用環境やその必要性からみても EAP (English for academic purpose) であり、つまり、EOP (English for occupational purpose) になりにくく、学習者の Motivation は個人的環境によりことごとく異なってくると言えます。これらのことから、入門期英語学習においてはまず、学習者の「学びに向かう力」を高めること、英語学習への Motivation を高め、学習者個々の英語の必要性 (English Needs) を感じさせるような指導が必要かと思われまます。

右図のように、英語が職業観と直結しない限り、体験型の授業形態だけでは十分だとは言えません。英語を学ぶ目的や必要性が受験にある限り、他教科と同様に、学問としての粋を脱し得ないのではないのでしょうか。

私たち英語科指導者は

「Global 化時代」に何を基礎基本とし、どのような指導をしていったら良いのでしょうか。本論文はその授業デザインについて解決の糸口を示すものであります。



Stevens, 1977

(「英語教育現代キーワード辞典」より)

2. English Needs Analysis

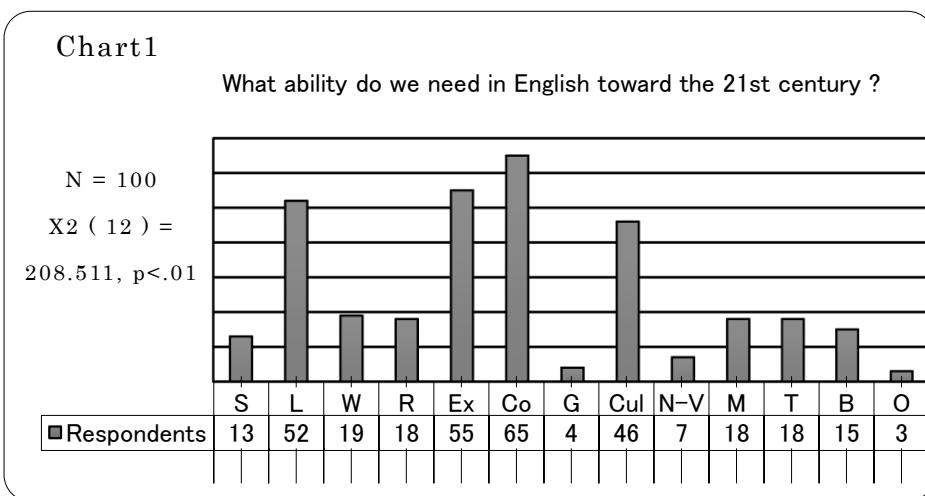
21世紀の英語はどのような考えのもとに指導され、指導に必要とされるものはいったい何なのだろうかという疑問のもとに、私は1996年に流行りだしたInternetを使ってWebアンケートを実施しました。これは英語の“Needs Analysis”ということになります。当時のWeb技術ではアンケート回収は極めて困難でしたが、Perl4.0によるCGI技術を駆使し、国内外の有識者の意見を募ることができました。(参考URL:(日) <http://www.asahi-net.or.jp/~ge9m-mtmt/anketo.htm> (英) <http://www.asahi-net.or.jp/~ge9m-mtmt/anketo2.htm>)

- Speaking ability = S
- Listening ability = L
- Writing ability = W
- Reading ability = R
- Self-expression ability = Ex
- Communicative competence = Co
- Grammar and Lexicon knowledge = G
- Cross cultural understanding = Cul
- Non verbal words / Body languages / Gestures = N-
- Manners / Learning attitudes = M
- Changing the Japanese way of thinking = T
- Basic academic ability / Basic learning ability = B
- Others = O

平成8年12月まで、開始から半年足らずで目標の100以上のご回答を得ることができました。「どのような英語力がこれからの21世紀を活躍する中学生にとって必要なのか」というタイトルで、左表のような項目でWeb Formにチェックしていただきました。結果はChart1のようになりました。

グラフ(Chart1)の結果よりお分かりの通り、次の4項目が支持されました。‘L’(Listening), ‘Ex’(Expression), ‘Co’(Communication), ‘Cul’(Culture)である。4技能で言えば「聴解能力」、「表現力・コミュニケーション能力」は予想通りとしても、「異文化理解」への支持が高かったことには驚きました。

更に、データを年代別・職業別に比較してみました。それぞれの年代・職業で標本数に差異がでましたが、概数30になるように調整しました。年代別比較では、「基礎学力」に



関して20代・30代で意識される方がいますが、彼らは「文法」についてはほとんど意識していませんでした。これは、「文法指導」に頼らない「英語基礎学力」や英語の「基礎・基本」を意識しているということになるのだと私は思いました。また、職業別の相関関係では、散布図からは強い相関は感じられませんでした。Nativeの回答が日本人の方の回答とかけ離れている(Chart2)ことが分かりました。

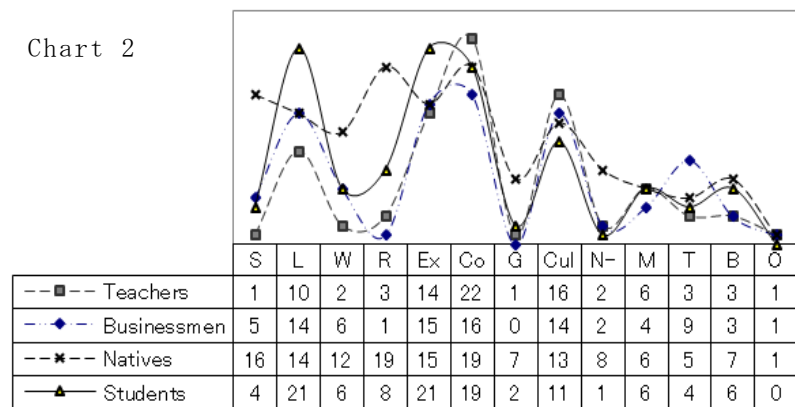
Nativeの回答者のコメントで特に印象的だったフレーズを以下に挙げます。

“Business language”, “Common language”, “International language”, “Universal language”, “English for life”, “Total English”...などでした。海外からの英語による回答には、4技能のみならず、ほぼすべての項目にチェックが入れられていたのです。

「すべての項目が大切であってどれとは決められない、早期から英語学習を取り入れ現状と照らし合わせて段階的・横断的に指導することが望ましい」とするコメントが多数ありました。

このような段階的・横断的な指導観は「21世紀の英語学習はどの技能・領域に力を入れていくべきか」とか「何を重点項目に設けて研究すべきなのか」と早急に結果を期待しすぎた私の見識の狭さを示唆してくれました。同時に、私が日本人外国語指導者として、あまりにも英語を「学問」として捉えていたからに他ならないことを教えてくださいました。即ち、Internet 上での web アンケートを通して、私の英語指導観自体が余りにも狭く、それが日本人的発想に他ならなかったことに気が付いた訳です。

Chart 2



「英語教育大論争（平泉渉・渡部昇一 1975）」で、半世紀近く前に議論されたことが未だに議論されているという側面も見逃せません。Native の回答から、「4技能が密接に相互関連していて、多角的な視野で指導されていくことが望ましい」と再認識されました。

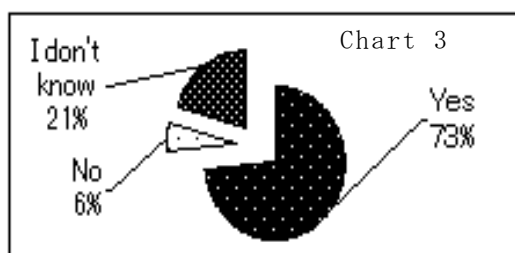
更に、基礎学力についても再確認の意味でアンケートを取りました。「英語教育の理念・

目標を考えるときのキーポイントは『英語を学ぶことが子供の幸せにつながっていくか』という自問である。勉強することがまた増えて、いやだなあ、というようなマイナスイメージを植えつけることなく、新しいことを学ぶことがこんなに楽しいことなのか、を体感できるようなスタートがきれるかどうかである。将来、中学校、高校へとつながってゆく英語学習が子供一人一人の幸せへと結実してゆくものだという信念を持って進んでゆくことができるかどうかである。英語コミュニケーション能力の育成は、むしろ手段であって、結局目指しているのは、その人にとっての人的意義である。」と松畑氏（岡山大学）は小学校への英語科導入について述べています。

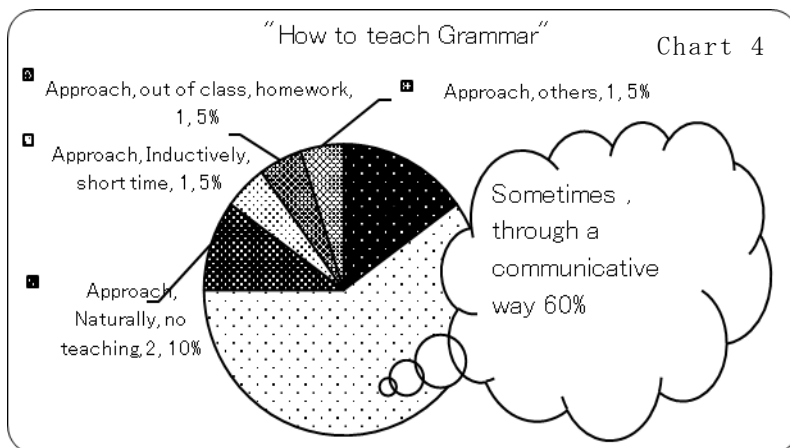
このことは「ライフスキル」的な教育観から来ていると思われまます。またそういった「将来に生きて働く学力」は目には見えにくい情意面（関心・意欲・態度）であることが多く、学習の過程を重視する「プロセス学習」により育まれると思われまます。試験の点数等、結果が即はっきりと見えるもの（「プロダクト学習」）に関しては知識・技能面に依存することが多く、上述した Strevens が言うところの EAP: "subject-based", "discipline-based" な指導の中から育まれると思われまます。

基礎学力というと私たちはすぐに知識・技能を問題にしてしまわないでしょうか。即ち、英語科にあっては文法や語彙力が基礎学力であると。しかし、つい最近まで文法指導とか語彙指導などは CLT(Communicative Language Teaching)に反駁するものとして英語教育界でタブーとなっていた気がします。

平成 8 年 10 月から「文法指導の必要性と基礎学力」について Web 上でアンケートを募りました。「文法指導は必要か」の質問に対する回答が下のグラフ(Chart3)に表されています。(参照: <http://www.asahi-net.or.jp/~ge9m-mtmt/anketo3.htm>)



左の表(Chart 3)の結果傾向は以後余り変わりませんでした。誰もが文法指導の必要性は認めていらっしゃるようです。「文法指導自体がいけないのではなく、その指導の方法が問題である」とする考え方が圧倒的で、その方法については下表(Chart4)を参考にしてください。「コミュニケーションな方法で時々」とする



回答が一番多かったです。

一方で、「英語基礎学力」については「英語への関心・意欲・態度面」に関するが多かったことは事実ですが、回答は様々です。基礎学力はこれだと一般化して提示すること自体が無理なのかもしれません。「情意面は相対的・論理的に測りうる学力にはならない」等の意見も若干数ありました。しかし、「基礎・基本には情意面も含む」（現代キーワード辞典）というの

は広く知られていることです。

「基礎学力」とは離れますが、「基礎・基本」としての英語への情意面の高揚は今後ますます必要だと思われまます。なぜなら、基本的に「言語活動」とは「練習・訓練」であり個人の到達目標に向かって集中して行われなければならないものです。そして、その「言語活動」は応用力とも言うべき複合的な要素をもつ「実践的コミュニケーション」の「基礎・基本」に他ならないからです。私たちは、今何の将来的必要性も感じえず、興味・関心・意欲もなく、具体的到達目標がはっきりとしていない中で、どうやって「訓練」的要素を英語科に取り入れていけば良いのでしょうか。

今日、初等中等教育での英語科指導体制が大きく変わろうとし、反面、学級崩壊・不登校・反社会的行動が増えつづける中で、まず、「生徒の英語への Motivation を高めること」が何よりもまして大切なのだと思います。できればその Motivation は「将来に生きて働くことができる」のだとする「English Needs」が体感できるものが望ましいと思っています。生徒個々がその「English Needs」を望ましい形で獲得できれば、「言語活動的な訓練・練習」に集中できる素地が多少なりとも育成されるのではないのでしょうか。ですから、私はあえて「英語の基礎学力とは将来に備えようと努力する個人の内発的 Motivation とも言うべき情意面の高揚にある」と言いたいです。

複合的・包括的「実践的コミュニケーション」には、文法指導が必要です、それを理解して運用できるような訓練・練習的「言語活動」も必要です、また「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」も「使う中から英語技能を獲得しよう」という趣旨から言えばとても大切です、語彙力も必要でしょう。このように、すべてのことが Web のように相互リンクして存在しています。上述したように、指導技術は時代や社会の変遷に伴って移り変わり続けているのです。つまり、社会的 Needs が英語指導領域の一部に脚光を浴びせていると考えて良いでしょう。反面、英語そのものの力とは様々な要因が複雑に相互関連していて、全体として包括的に獲得・学習されていくものだと思われまます。

"No single method could guarantee successful results" (Coleman Report, 1923, USA)

アメリカで半世紀以上も前に結論されたことは、今日にも十分当てはまることだと思います。このことは「英語指導法に王道なし」を意味しています。「理論は間接的に授業に影響している～。教師は実験的な情報と経験的な知識を統合する道を見つけなければならない。～多角的視点の全てが独自の視点を生む。」(L.M. ビービ、1987、島岡・卯城・佐久間、訳 1998) このビービの言葉は「一辺倒な指導ではなく、多角的視点をもった指導」を示唆していません。これは学習者の実態・現状を把握した上で、教師は学習者に必要とされる技能・領域

の指導にあたるべきことも意味していると思います。

実践的コミュニケーションは「メッセージの送受信が基本」ですが、実際の教育の現場では、たとえ「伝えたい内容」があっても思ったことをうまく伝えられない生徒がたくさんいるのです。それは所謂「基礎・基本」の欠如に起因しています。教え込むべきことは教え込んであげたいのです。そのためには生徒の内発的 Motivation を高め、「やる気」を持続させていきたいのです。

私は、「生徒が異文化や世界の現実と接する中から英語の必要性を見出し、自己の視野や物の見方が広がることの喜びを味わう」中から、英語学習への内発的 Motivation を産み出し情意面の向上につなげていくことを強く願っています。

平成 9 年度、中学 2 年生延 138 人を対象に下記等の「国際理解教育に関するアンケート」を取りました。(参照：<http://www.asahi-net.or.jp/~ge9m-mtmt/globanswer.htm>) アンケートすべての詳細はここでは述べられませんが、その中で、「あなたが『国際化社会だなー』と感じるのはどんな時ですか」(Chart5)というのと「あなたが外国語を耳にするときはどんなときですか、またどんな場所ですか」(Chart6)という 2 つのアンケート結果からご覧ください。英訳しています。

Items:

3 = 'When I meet many foreigners on " 3 Day March" day

1 = 'When I see foreigners on the street'

9 = 'When AETs come'

* '3 Day March' は東松山市をあげての「歩け歩け大会」のこと

「国際化を実感できるのは教室から外の世界」ではないかと私は考えています。

Items:

5 = 'TV or radio'

8 = 'English lesson'

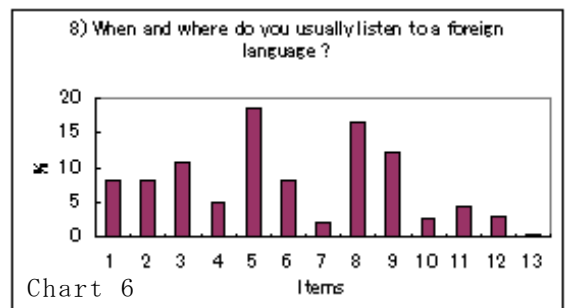
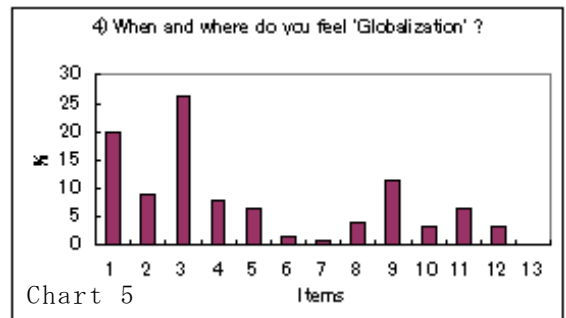
9 = 'When I meet a foreigner'

3 = 'At the cram school'.

生徒が「生きた英語を耳にする」のはテレビ・ラジオ等の Media からが多いのです。英語授業で「生きた英語」が使用されているかどうかとも問題ですが、Media を授業に取り入れていくべきことが大切であろうことはお分かりいただけることだと思います。Media の影響力とは、今も昔も児童・生徒にとって、とても大きいものなのです。すんなりと(?)受け入れられてしまいます。このように、Media を通して「国際社会を実感できる教室外の空間で、生きた英語に触れる」ことが「英語の必要性を生み、将来に備えた実践的コミュニケーションへの興味・関心・意欲を高めてくれるだろう」と予想されます。「生徒が視野を広げ、将来の実践的コミュニケーションを意識し、英語の必要性を実感してくれる」、そんな Media 活用の実践を考える必要があるのではないのでしょうか。

3. 研究仮説 (Topic Centered Teaching Method)

「外国語によるコミュニケーション能力の育成を意識した取組、特に『話すこと』及び『書くこと』などの言語活動が適切に行われていないことや『やり取り』・『即興性』を意



識した言語活動が十分ではないこと、読んだことについて意見を述べ合うなど、複数の領域を統合した言語活動が十分に行われていないことなどの課題がある。」(新学習指導要領解説より)

昨年告示された学習指導要領には、「4技能を統合した意見や考えの即興的なやりとりの必要性」が述べられました。では、そのための具現策は何なのでしょう。

私の勤務する北中学校173名のアンケート(上記同様アンケートの第二版)によると、生徒側の「異文化理解」が教室外の実体験の場で起こっていることが多い事実が判明いたしました。このことから、英語科授業を教室内での「4技能習得訓練等」と教室外の「異文化体験学習」を通しての「学びに向かう力」の育成に分けて考えることが有意義ではないかと考えました。

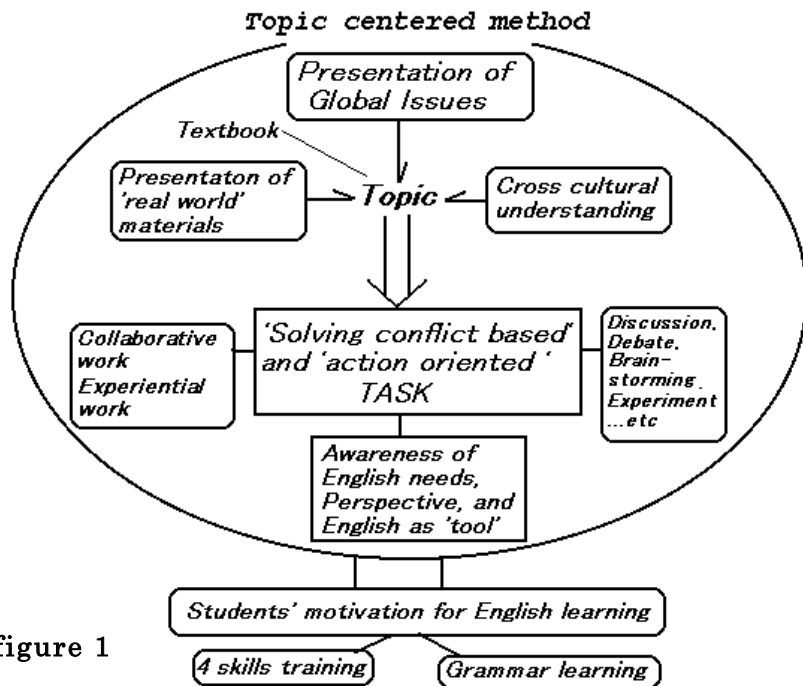


figure 1

左記 figure 1 にまとめられた “Topic Centered Teaching Method” は新学習指導要領と Global 化に対応した英語科指導教授法の体系デザインです。

Goal となる “TASK” は異文化体験学習のことです。それは有意義な Activities を伴う Topic を活用します。その Topic は教科書題材分析によるものとし、できる限り “Global Issues” を扱うものとします。

Global な視点での「対立を生むような Topic」 は生徒の「心の変容」があるばかりでなく、「多様性や考え方の違い」を学ぶことができるでしょう。

そういった Topic が、Message 色豊かな “Media” を通して、対話的に深められていくことがこれからの Global 化に対応しうる英語授業のデザインだと確信しています。

手だてのカギとなるのは、“Media” の活用と異文化体験学習です。授業を変えるために「教室から外へ…」と申しましたが、実際に「国際交流」や「Global Education という Study Tour」のように物理的に教室外で行われる諸活動だけを意味するものではありません。そこには “Media” を通して精神的に教室空間を離れることを意味します。“Media” とは単に Multimedia を意味するものではなく、教科とそれを教えるべく教具教材、更に教室環境、指導者の姿勢態度までも含みます。即ち、英語と学習者に介在するすべての媒体を意味しています。(‘Global Teacher, Global Learner’ Graham Pike/David Selby, 1988)

実現の具体的手だてとしては、「教科書の Topic を重視し、英語使用実体験の場の提供とともに、“Media” を通した学習形態の改善」が望まれると思います。しかし、Topic 自体が Message 色豊かな “Global Issues” の性質を帯びている必要がありますので、現行の教科書 Topic に必要に応じた改良が必要です。更に、英語を Tool とした行動目標としての “TASK” を考案し、その活動の結果、「異文化体験学習」ができることが大切だと思います。そうす

ることにより、最終的には学習者；生徒側の「Perspective；視点の変容」若しくは「心の変容」、更に「英語の必要性の体験」を生み出していけると考えています。

私の平成9年8月に県内外の中学英語教員の方々に取らせて頂いたアンケート結果からも教科書の Topic を活用して異文化指導を行っている先生方が大多数であり、その結果は5年前に行われた同内容のアンケートと同じでした。つまり、教科書の題材こそが重要であり生徒側にも自然に受け入れられやすく、なおかつ教師側で指導しやすいのだと思います。ですから、改めて年間指導計画を大々的に作成するのではなく、教科書題材を補充深化し“Global Issues”に近づけていく方法で従来の国際理解教育よりも深まる「異文化体験学習」指導ができると考えています。教科書題材で英語の必要性に関するようなトピックを分析し、“Global Issues”として提示できるように分析もしました。ここで忘れてはならないのは生徒側の活動です。“TASK”は Solving-conflict で Collaborative な活動になっていてその活動をすること自体に意味がある“Global Activities”なものでなければなりません。

4. 研究実践

私は平成8年から外国語メディア学会に属し、全国の CALLL (Computer Assisted Language Learning Laboratory) 実践を研究しています。CALLL は、学校環境設備に大きく依存し、公立学校においては継続性・汎用性に欠け、暫時的であることは事実です。以下の平成8年からの実践は「誰でもどこでもいつでもできる」“Media”活用実践例です。

「仕事で『英語を頻繁に使う人』と『時々使う人』を合わせても全職業人の1割にしかならない。」(「日本人と英語の社会学」、寺沢) しかも、「グローバル企業に勤めると英語を書くことが仕事になる。」(「本物の英語力」、鳥飼) ということから察して、レトリックを教えながら、Topic を e-mail で英語表現する指導は必須だと私は感じていました。

(1) e-mail 交流の実践 (参考：<http://www.geocities.co.jp/HeartLand/9966/club.html>)

E-pal, Key pal, Partner school を探します。こちらが中学2年生だとすると相手にも同世代を求めがちですが、実際のヨーロッパの ESL の国々の生徒は単なる e-mail 交流に留まらず何らかの Project を考えています。相手校が ESL または L1 の環境なら、小学校高学年若しくは中学1年生 (5th grade-7th grade) あたりが良いと思います。EFL 環境の相手であれば同世代が期待できるでしょう。私の場合は次の2ヶ所の Web サイトに自分のクラスを登録しました、登録して1週間くらいしてからいくつかの学校からコンタクトが来始めました。

“Intercultural E-Mail Classroom Connections” (<http://www.stolaf.edu/network/iecc/iecc-form.html>)

“ePALS Classroom Exchange” (<http://www.epals.com/index.html>)

いつまでも自己紹介と趣味の共通点のないままの一方通行の e-mail 交流では自然と消滅し、いつの間にか音信不通になります、私の経験上早いところは2回程度で終わってしまいます。では自己紹介と趣味の次は何を Topic にしたら良いのでしょうか、以下に実践例を挙げます)

例1: 異文化間交流をねらって複数校での意見交換 (Adorno (Germany), Willunga (Australia), StMary (US))

平成9年オーストラリアの Secondary School からの質問です

Question 1: What are the main festivals that you celebrate? What are their origins?

Question 2: Who are the most popular singers and groups in your country? Do you like any foreign singers? Do you know of some Japanese Singers?

Question 3: What are some of the latest and most popular computer games in your country?

Question 4: "Tamagotchi" (popular handy pocket-size game) have been the most popular here. How popular are they in your country?

Question 5: What kinds of TV shows are popular among school students in your country?

<上と同じ質問をドイツやアメリカの学校にして話題を共有しました。以下はその返信です>

1. Christmas and Good Friday, Easter and Whitsuntide (church holidays) The 3rd Oktober= national day of the reunification

In catholic areas: Carneval in Feb.

2. The german groups are: Take that, Caught in the Act, Tic Tak Toe but they are popular with girls.

But for Boys are the famous groups: Scooter, Dj Quiksilver, Marusha, der Wolf, etc

The most songs are in English, many groups and singers come from the US.

We don't know Japanese musik in Germany

3. The most famous Games are: Comand&Conquer 2 Red Alert, Mdk, Sim City 2000, Duke Nukem 3D, Wing Comander 4, The Need for Speed 2.

4. They have just started to get popular, only few have one in our school, but we read in a magazine, that they become popular.

5. Al Bundy, Simpsons, 100000 DM Show, Enterprise and Voyager.

Good Bye *****

*情報は複数校で共有し、文中の解読不能な英文・単語等はクラス全体で類推しました。

例2: Greeting Cardづくり

海外の Greeting Card の例を参考にして、生徒にデザインさせました。

参考: <http://www.bluemountain.com/index.html>

Windows 付属の Paint で描かせ圧縮等してメールに添付していました。



←これは平成 11 年度の生徒作品ですが、何と 30 分足らずでこの生徒は完成させています、Card の多彩な例を生徒に上記のサイトで事前に見せておくことがポイントです。Greeting Card を作った主な英米文化圏の祝日等は以下の通りです。Easter・Easter Week(3/21 以後の満月の次の日曜～), Halloween(10/31), Thanksgiving Day(11 月の第 4 木曜), Christmas Season(Thanksgiving Day の次の日から)・Christmas Day(12/25)*カードはメール添付しました。

(2)「異文化理解ビンゴ！」

授業の最初によく Game 感覚でビンゴをやると思いますが、私の場合は「異文化理解ビンゴ」です。ビンゴを通して英米文化圏等の文化風習を生徒に知ってもらい、視野

を広げてもらうために行っています。例：Christmas ビンゴ。 やりかたは、まず、はさみとのりが必要です。1 番から 24 番までの絵を数字と一緒に切り抜いて A～D 以外の絵の場所に貼り付けます。普通 15 分くらい掛かります。その間クリスマスソングを流します。余ったものは次回に重ねて貼り付けます。先生はそれぞれの絵を英語で説明します、「Picture tell」のやり方か「What is it ?」方式です。「メリークリスマス！」と言って始めます。例えば、「It is a house, it looks delicious, it's sweet, What is it ?」「Number 10 !」、「Yes, that's right ! It's a candy house !.....」縦、横いずれか一列そろったら「ビンゴ！」です。

A Christmas Bingo !

				B
				
				1
				2
				3
				4
				5
				6
				7
				9
				24
				10
				11
				13
				14
				15
				16
				17
				18
				19
				20
	D			

これらの画像は Internet 上から Free の画像をダウンロードしてきて、ワークシートに貼り付けたものです。私は、年間を通して必ず次の 4 つはやっています。

「Easter ビンゴ」、「Halloween ビンゴ」、「Thanksgiving Day ビンゴ」、「Christmas ビンゴ」です。詳細は下記の URL を参考にして下さい。

<http://www.asahi-net.or.jp/~ge9m-mtmt/start/halloween/Halloween.html>

http://www.ne.jp/asahi/english/education/myweb/crosscul/Easter_Bingo/Easter_bingo.htm

(3) 校内 LAN の活用

e-mail 交流というと、上述してきたような学校外の WAN をイメージされるでしょうが、校内の LAN(Local Area Network)でも十分に e-mail 交流はできるのです。しかも、情報教育ルームへの移動教室ですから、生徒も気分は「教室から外」です。実際、校内 LAN の方が定期的且つ計画的な指導ができます。約 10 年間、「Study Note」というグループウェアを使って、生徒は AET や友人同士で、英文 e-Mail 交流や BBS (電子掲示板) 情報交換、データベースづくりなどをしました。

(詳細：<http://www.ne.jp/asahi/english/education/myweb/study/study.htm>)

画像や音声を伴った e-mail は生徒の英語学習意欲を大いに促進しています。Study Note は生徒の作成する電子個人 Note を様々な形で提示できる Network ソフトです。クラスの壁を超えて、学年の枠を超えて e-mail、BBS 交流、データベース作成・閲覧ができます。様々な Graphic design を施した e-mail がやり取りされました。BBS、データベースは学年を越えて、e-mail はクラスを越えてやりとりができました。



GUI 画面が楽しい！若干小学生向きではある。ポストはパスワード保護されている。

Study Note 使用期間:平成15年菅谷中学校時代～平成25年松山南中学校時代



常駐 AET にも協力してもらい、空き時間や放課後を使って生徒に返事を書いてもらっています。特に、教室内で AET と面と向かって会話できない生徒でも email では様々なことを表現しているという事実があります。掲示板では主に英語や異文化に関する素朴な疑問、質問を

掲示してもらっています。学年の枠を越えた意見交換ができます。掲示された疑問・質問を調べ、その結果をデータベースにまとめています。データベースはカテゴリ別に検索ができますので、生徒が生徒の作成したデータベースで学習できます。生徒が調べたデータを PC-SEMI 等で相互発表活動もしました。特に、教科書題材に関連しているものは平常授業でも活用するように心掛けました。

(4) “Global Issues” を使う

授業の最初で、Message 色豊かな Topic を扱います。「開発教育的手法」を用います。「ワークショップ版・世界がもし 100 人の村だったら」を良く使用しています。かつて、“Dear” (<http://www.dear.or.jp/>) の会員だった私は“Photo Language”の手法を用います。これらの題材は児童・生徒の「視野を広げ」、「物の見方や考え方に変容」をもたらします。その内容は深く、ここでは述べられませんが、まさに「Global 化に対応した英語教育」の礎となるべき内容だと確信しています。詳細は私の修士論文「グローバル英語教育の導入」(1998)をご覧ください。

5. 研究成果と課題

言葉は文化です。指導法は多岐に渡り、時代で変遷します。指導者は不易と流行を意識しなければなりません。32 年間の英語教師経験から、「英語は視野を広げ、夢を育む」教科であると私は信じています。全員参加型学習を可能にするのは“Media”活用と「異文化（グローバル化）体験学習」です。英語を「学問的」に捉えず「文化的」に捉えたとき、児童・生徒の「学びに向かう力」は格段に向上し、そこに学力格差はあまり生じません。見たり聞いたりした Global な Topic を考え、話し合うことが Global 化に対応した英語教育の基礎学力です。その基礎の上に、バランスよく「学問」としての英語を教授する方法で、現状までにたくさんの「英語好き」な児童・生徒を育てたと感じています。反面、Input 活動に依然悩んでいます。言いたいことを適切に表現する英語を“Intake”させ、“Stock Phrase 化”させる方法を認知言語学的観点から研究しています。

6. 参考文献

・「グローバル人材育成の英語教育を問う」大津由起雄 他・「国際パカロレアを知るために」大迫弘和・「本物の英語力」鳥飼玖美子・「教育の最新事情がよくわかる本」太田洋・「グローバル英語教育の導入」松本光正 他